



交歓する車景

来たる車技術の発達した時代に向けて、今ある住宅の形を見つめ直し、淘汰されるであろうカーポートの空間はリアルな場に成りうるかと考えた。そこで、将来変わりゆくであろうカーポートの空間を、駐車だけではなく、様々なアクティビティの生まれる場として循環していく「まち」を提案する。街区に開いたカーポートで行われる活動によって、人々がつながり、コミュニティが広がっていく。本来、駐車されるだけの空間が、時に合わせ「交換」され、まちは「歓楽街」となっていく。

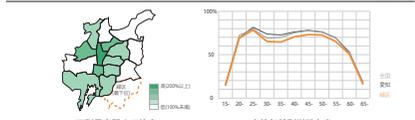


01. 車の所有が変化していく未来



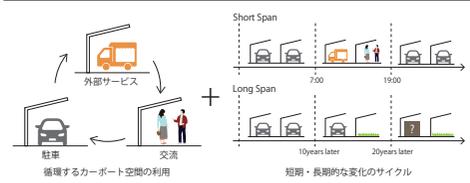
自動運転技術の向上、カーシェアの普及により、駐車空間の必要性は低下していくだろう。カーポートが車庫という単一の機能だけではなく、様々な機能が入り込むプラットフォームに成り得ると考える。

02. 車社会での過ごし方、在り方



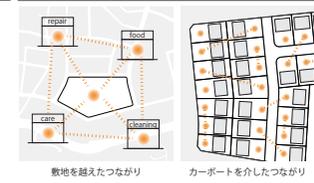
車社会の愛知県緑区の人口は、日本は区外へ流出しているため、日本はカーポートは使われていないであろう。しかし女性労働従事者は全国平均より低く、日中の子育て世帯の過ごし方はまちの豊かさに影響する。

03. 時に応じて変容するカーポート空間



カーポートを駐車のためだけではなく、外部サービスやインフラの介入を通して、交流を想定し、数十年先の風景へつながる提案とする。短期(車が不在となる日中)、長期(将来的な車の不必要時)的な循環を想定し、数十年前の風景へつながる提案とする。

04. ネットワーク的につながるコア



カーポートを介したつながり。街区で1つ共有物を持つのではなく、街区外のサービスの介入によるつながりとし、隣接するカーポートを介したコミュニティといった、ネットワーク状の共有物をコアと考える。

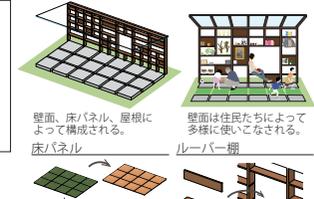
05. カーポートで育む街の仕組み

05-1. 住民と地域をつなぐシステム



アプリを用い、街区内の住戸とまちの施設間で要望、連絡を共有する。施設側はカーポートでサービスを提供し、公園で車などの充電、住民への広告効果を受ける循環をつくる。

05-3. 多様性のあるカーポート



05-2. 回遊性のある街区



公園① 鉄塔を遠景として用い、軒下・パーゴラ・集会所を配置する。また、周辺街区を巻き込んだ防災公園とする。災害対応車の駐車スペースを公園内に確保することで、公園と災害拠点の二面性を確保する。

車道② 街区内に回遊性を持たせつつ、十分な住戸数を確保できるような単車道を通す。

フットパス③ 勝手口をつなぐことで、公園にアクセスのよさを確保する。

